



Data

監督・脚本: パルナバーシュ・トート

原作: ジュジャ・F. ヴァールコニ
『Férfiidők lányregénye』

出演: カーロイ・ハイデュク/アビ
ゲール・セーケ/マリ・ナジ
/カタリン・シムコー/パル
ナバーシュ・ホルカイ

👁️👁️ みどころ

「ホロコースト」の主な舞台はフランス、ポーランド、オランダの他、デンマーク、ノルウェー、フィンランドもあるが、ハンガリーは？

原作における中年医師と16歳の少女との会話劇に魅かれたハンガリー生まれのパルナバーシュ・トート監督は、『この世界に残されて』という邦題とおりのストーリーを淡々と綴ったが、本作はホントに「ホロコーストもの」？それとも・・・？

ナチスドイツから解放された戦後のハンガリーを舞台とし、1948年からスターリンが死亡した1953年までを描いた本作を、日本のその時期と比較しながら見ると、今更ながら日本に生まれたことに感謝！もっとも、日々の“改革”が不可欠な今、「この世界に残されて」ではダメなことは明らかだが・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ハンガリー発の「ホロコーストもの」をはじめて鑑賞■□■

私は2020年5月20日に『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集—戦後75年を迎えて—』を出版し、その第2編「ナチス支配下のヨーロッパ各地は—服従？それとも抵抗？国は？個人は？—」では、第1章を「フランスでは？」、第2章を「ポーランドでは？」、第3章を「オランダでは？ベラルーシでは？オーストリアでは？」、第4章を「デンマークでは？ノルウェーでは？フィンランドでは？」と分類し、多くの「ヒトラーもの」「ホロコーストもの」を掲載した。そこには「ハンガリーでは？」の章はなかったが、実はハンガリーでも約56万人ものユダヤ人が虐殺されたそうだ。

しかして、今回はじめてハンガリー発の「ホロコーストもの」を鑑賞したが、本作はその実態を描く映画ではなく、『この世界に残されて』という邦題どおり、ホロコーストを生き延び、“この世界に残された”2人の主人公の姿を描くものだ。そのストーリーが始まる

時代は1948年。ハンガリーは1944年3月にナチスドイツに占領されると共にユダヤ人の悲劇が強まり、首都・ブダペストにいた20万人以上のユダヤ系ハンガリー人のうち、戦後まで生き延びることができたのは12万人ほどだったそうだ。

本作冒頭のシークエンスは、少女クララ（アビゲール・セーケ）が、その保護者である叔母のオルギ（マリ・ナジ）に付き添われて産婦人科の医師・アルド（カーロイ・ハイデック）の診察を受けるもの。そこでの診察は、「16歳にもなるのに、まだ初潮が来ない」という相談だから、ホロコーストには全く関係がない。すると、本作は一体何が「ホロコーストもの」なの？

■□■この男の暗さはなぜ？クララはなぜこの男に？■□■

そんな診察風景を見る限り、アルド医師の診察にどこまで意味があったのかよくわからない。しかし、病院からの帰り道、クララはアルドのことを「あの人には喜びの感情というものが無いみたい。少しかわいそう」とオルギに語っていたが、本作では冒頭から物事をハッキリ語るクララと、口数が少なく、とにかく暗い印象のアルドとの対比が顕著だ。診察の時、アルドが「お母さんも不順だった？」と質問したのは問診の一つだが、それに対するクララの答えはイエスでもノーでもなく、「（お母さんは）まだ生きてます」というものだったから、まともな問診になっていないことは明らか。

スクリーン上はその後、初潮が来たことをアルドに伝えるため、クララがわざわざ病院を訪れるシークエンスになるが、これも必要な診察（治療）なの？そして、クララはアルドの帰り道を一緒に歩きながら、生理に伴う体調の話をしたうえ、なんとアルドのアパートに入り込み、お茶をご馳走になっているからアレレ……。ハンガリー発の「ホロコーストもの」のストーリー展開はどうなっていくの？まさか42歳の独身医師・アルドと16歳の初潮が来たばかりの少女・クララがこのまま恋に落ちていく話ではないはずだが……。

■□■原作は？監督は？本作はホロコーストものにあらず！？■□■

本作の脚本を書き、監督したのはバルナバーシュ・トート監督。1977年にブダペストで生まれた彼はユダヤ系ではなく、身内にホロコーストの犠牲者はいないらしいが、ブダペストは記念碑やミュージアムなどを通じて、ホロコーストの記憶が溢れているようだ。パンフレットにある「Interview」によると、彼がジュジャ・F. ヴァールコニの原作小説『Férfidők lányregénye』に魅かれたのは、10代の少女の視点で語られる“少女の物語”と、“ある男の時間”のコントラストが興味深く感じられたためだ。そのことについて、彼は「何より最も心惹かれたのは、美しく描かれた二人の登場人物です。セリフ回しも見事で、脚本にする際にその多くを短くしたり省略したりするのは避けられませんでした、書き換える必要がないほど巧みに綴られていました」と語っている。

私は原作小説の展開はもちろん知らないが、本作では、アルドがクララを家の前まで送り届けた際、クララの望むままにアルドがクララを抱きしめる姿をオルギが目撃していたため、オルギから「娼婦を預かった覚えはない」と言われたクララが、再びアルドのアパ

ートを訪問するストーリーが展開していく。アルドに中年オヤジ特有の怪しげな視線が全くないことは明らかだし、クララの方もアルドを信頼し切っていることは明らかだが、アルドの部屋の中では、一見「アレレ、これは・・・？」と思うような情景が登場するので、それに注目！もっとも、いくら「帰りたい」と泣きじゃくっていても、16歳の少女を一晩男1人の部屋に泊めるのは如何なもの？さらに、アルドがベッドとソファで別々で寝ようとしたのは当然だが、アルドのベッドに潜り込んできたクララをアルドが受け入れたのは、いくら「独りが怖くても娼婦じゃない。私も同じだ」と理屈をつけても、如何なもの？

日本式の頭の固い教育委員会的観点からはそんな批判を免れないが、本作にそんな批判をする奴はよほどのバカ。本作では、冒頭から次々と展開されるさまざまなシーケンスでの2人の会話を、バルナバーシュ・トート監督がインタビューで語っているように、しっかり味わいたい。それを聞き、その会話の中で少しずつ明らかになっていく2人の過去、すなわち2人が背負っているホロコーストの傷を確認していけば、まさに『この世界に残されて』という邦題の意味がはっきり確認できるはずだ。

■□■男子はみんなバカ！クララの男性観アルドの女性観は？■□■

本作導入部では、かなり不自然なアルドとクララの関係が目立つが、オルギがアルドに対して「クララの保護者になって欲しい」と頼み、アルドも「私は明るい父親にはなれないが、いないよりはマシかも」と答えたところから、この3人の極めて良好な関係が築かれ、円滑な日常生活が進んでいくので、それに注目！もちろん、アルドはホロコーストによって妻と2人の息子を失った悲しみを抱き、クララは母親と妹を失った悲しみを内に秘めていたが、この3人の生活が続けばノープロブレム。ところが、公園のベンチでクララがアルドの膝枕でおしゃべりしている姿をクララの教師・ヴィダークに見られたから大変。

さらに、「男子はみんなバカだし、くさい上にくだらない」と言いながら、派手な化粧をしているクララは派手なダンスパーティーに出かけていたから、アレレ・・・。もっとも、そこでアルドが「口紅が濃すぎないか」と、アドバイスするのは、いかにも不自然だが……。本作は一貫して『この世界に残されて』というタイトルに沿ったストーリーだが、スクリーン上は42歳の中年男・アルドと、16歳の少女・クララとの微妙な男女関係、感情もチラホラと見えてくるから、それにも注目！

アルドの誕生日を祝うサプライズのシーケンスを観ていると、アルドとクララにオルギを加えた3人の関係は割調だが、「男子はみんなバカ」と言っていたクララがパーティー会場で出会った男子学生・ペペ（バルナバーシュ・ホルカイ）のような同世代の男に興味を示さず、父親的存在のアルドに対して男性を感じてしまうと、ちょっとヤバいかも。そんな微妙な会話は、クララがアルドに対して、「再婚はしないの？」と質問するシーケンスで登場する。その回答は、「しない。何でも一人でできるから」とハッキリしたものだったから、クララは一安心。クララも私もそう思っていたが、その後のスクリーン上には、

アルドが以前に診察室で出会った39歳の独身女性・エルジ（カタリン・シムコー）をカフェに誘うシークエンスが登場するので。アレレ・・・。

このような展開から見えてくるクララの男性観は如何に？そしてまた、アルドの女性観は如何に？

■□■スターリンのハンガリー支配は？共産党の影響力は？■□■

私は1949年1月生まれだから、本作冒頭の物語はほぼ私が生まれたのと同じ時代。1945年8月15日に敗戦を迎えた時の日本は一面焼け野原だったし、原爆が投下された広島と長崎は「75年間は草木も生えぬ」と言われる惨状だった。しかし、1951年9月に「サンフランシスコ講和条約」を締結した日本は、1950年～53年の朝鮮戦争による特需が大きな追い風になった。そして、黒澤明監督の『七人の侍』（54年）、中平康監督の『狂った果実』（56年）等に見るように、日本映画も日本国も1960年の“安保闘争”の中での日米安保条約の締結という大きな転換点を含みながら、順調な高度経済成長路線をひた走った。しかし、本作導入部で描かれた1948年以降のハンガリーは、スターリンの支配下どんな国になっていったの？

その不幸を象徴する1つのエピソードが、クララに説教をする校長たちが、「これからロシア語の授業がある」と語っていること。校長たちが共産党員であることは明らかだが、本作中盤には、アルドの親友で小児科医の医師であるピシュタが突然アルドを訪れるシークエンスが登場する。そして、そこでは家族を守るためやむを得ず入党し、イヤイヤながらスパイのような仕事に就かなければならないという事情が語られるので、それに注目！

日本の敗戦直後に、マッカーサーが厚木飛行場に降り立った時は、占領された日本の将来像は全く見えなかったが、戦後の日本を統治した占領軍がソ連や中国軍ではなく、アメリカだったことに改めて感謝しながら、本作後半に見るスターリンによるハンガリー支配や共産党の影響力を確認したい。

■□■ “今のままでいよう” が望みだが、それは可能なの？■□■

戦後の日本の総理大臣で、演説力を評価されるのは田中角栄と小泉純一郎の2人だけ。田中角栄は日本列島改造論で国民を牽引したが、「自民党をぶっ壊す」と絶叫した小泉純一郎の旗印は改革、つまり、停滞した現状を変えることだった。

それに対して、本作でアルドとクララが最も大切にしているのは、“今のままでいよう”ということだから、小泉総理の旗印とは正反対だ。日本でも、終戦直後、多くの戦犯たちが動きを封じられる中、獄中から解放された日本共産党の幹部たちの行動によって、日本共産党は急速に勢力を拡大させた。当時はそれが進歩であり、改革だとみられていたのと同じように、ハンガリーでも、スターリンの指導下で社会主義の方向に進むことが進歩、改革とみられていたのは当然だ。したがって、家族のホロコーストを引きずり、この世界に残されてしまったアルドやクララのような人物が互いに寄り添って“今のままでいよう”と願うのは、もつてのほか。社会の進歩から更に取り残されるだけだ。たしかに、そう言

えなくもないから、“今のままでいよう”という2人の願いはかなえられるのだろうか？私
はそこに注目していたが、結末に向けてスクリーン上は意外な方向に進んでいくので、そ
れに注目！

本作は1953年3月5日、スターリンが死亡したとのラジオニュースが流れるシーク
エンスで終わる。折りしも、1953年の日本では、小津安二郎監督の『東京物語』（53
年）が公開されていたが、その時、アルドとクララはそれぞれいかなる生活を？そして、
この2人はそのニュースをそれぞれどんな思いで聞いていたのだろうか？そんな興味深い
静かなラストは、あなた自身の目でしっかりと！

2021（令和3）年1月18日記